

若手音楽家育成事業
プラットフォームコンサート
高柳鞠子「奏でる記憶、色づく情景」

2024年7月5日(金)18:30 開演
穂の国とよはし芸術劇場 PLAT アートスペース

出演:たかやなぎ まりこ(フルート)
ピアノ伴奏:杉森絵里

【コンサートプログラム】

1. 朝の気分 (劇音楽《ペール・ギュント》 作品 23 より)

グリーグ 作曲

1843年生まれ、1907年没

エドヴァルド・グリーグはノルウェーの国民的作曲家で、ピアニストとしても活躍した人物です。《ペール・ギュント》は、同じくノルウェーの詩人で劇作家のヘンリック・イプセン(1828-1906)によって書かれた詩劇で、ノルウェーに伝わる民話や伝説をもとに創作されました。全5幕から成る壮大な物語で、自由奔放な主人公ペールの奇想天外な流浪と冒険の人生が描かれています。1874年、イプセンはこの詩劇の上演にあたり、当時若手作曲家として注目されていたグリーグに付随音楽の作曲を依頼、グリーグの音楽の美しさもあいまって1876年に行なわれた初演は空前の大成功をおさめ、以後繰り返し上演される人気作となりました。

「朝の気分」はこの詩劇の第4幕冒頭、母を亡くしたペールが故郷を離れたどり着いたモロッコで、心機一転新しい人生を開拓しようと迎える朝の場面の音楽です。とりわけ有名な楽曲なので、皆さん一度は耳にしたことがあるのではないのでしょうか？本日はフルートとピアノの二重奏に編曲したものを聴きいただきますが、もともとのオーケストラ版でもフルートが活躍します。

2. フルート・ソナタ「パンの笛」 作品 15

ムーケ 作曲

1867年生まれ、1946年没

タイトルにある「パン」とは、ヤギのような角と脚を持つ半人半獣の姿をした山野と牧畜を司る神様のことです。音楽好きとされるこの神様は、古来より笛を持った姿で描かれることが多く、そのイメージがフル

ートと結びつけられたことから、フルートにはこの「パン」を題材とした作品が多く書かれました。特に有名な作品としてドビュッシー作曲の《牧神の午後への前奏曲》が挙げられますが、本日演奏するのはそのドビュッシーと同時代に同じくフランスで活躍していたジョルジュ・ムーケによる作品です。

作曲家ムーケは残念ながらほとんど忘れ去られた存在となってしまいましたが、このソナタだけは今でもフルートの大切なレパートリーとしてよく演奏されます。明るく軽快な雰囲気がか親しみやすく、フルートという楽器の特性も生かされているからでしょう。全3楽章から成り、それぞれの楽章にはタイトルが付けられているだけでなく、古代ギリシャの詩人たちによる短い詩も添えられています。音楽だけでも十分に楽しめる作品ですが、詩の情景を思い浮かべながら聴くとまた違った風情が味わえる気がします。以下に邦訳を掲載しますので、自由に重ね合わせてお楽しみください。

第1楽章 パンと羊飼いたち

「おお、山深く住むパンよ、その甘い唇で歌を歌っておくれ、葦(あし)の笛を奏でながら歌っておくれ」
(アルカイオス)

第2楽章 パンと鳥たち

「人気のない木陰に座り、パンよ、なぜそのような甘美な笛の音を奏でられるのだろうか？」(アニユテ)

第3楽章 パンと妖精たち

「椗の木の陰にひそむ洞窟よ、静かに！岩山から湧き出す泉よ、静かに！子羊のそばで鳴いている雌羊よ、静かに！パンが、潤んだ唇をシラクスに置き、美しい笛の音で、歌っている。彼の周りでは、水の精と木の精が、軽やかな足どりで、皆そろって踊っている」(プラトン)

3. 子供たちが遊んでいる（劇音楽《母》より）

ニールセン 作曲

カール・ニールセンはデンマークの作曲家です。「人魚姫」や「マッチ売りの少女」で知られる童話作家のクリスチャン・アンデルセンと同じフューン島の生まれで、豊かな自然に囲まれて幼少期を過ごしたからか、20世紀のモダンな響きの中に不思議な素朴さが同居する、個性的な作品をいくつも残しました。《母》はデンマークの詩人ヘルゲ・ローデによって書かれた劇作品で、第一次大戦にドイツが敗北したことにより、シュレースヴィヒ北部の地域がデンマーク領に復帰したことを記念して書かれました。プロローグと7つの場面から成るこの物語は、デンマークを表す「母」と、復帰した地域を表す「息子」によるおとぎ話のような内容で、音楽を担当したニールセンは、ここにデンマークの古い民謡や大戦に参加した国々の国歌などを引用し、祖国の記念すべき出来事に花を添えました。「子供たちが遊んでいる」は第4幕で演奏される音楽で、分断を意味する氷の壁に座った「希望」という登場人物によって奏でられます。果たしてそこにはどんな意味が込められているのでしょうか……？

4. 前奏曲 第15番「雨だれ」

ショパン 作曲

1840年生まれ、1849年没

ジョルジュ カトリーヌ、フィリップ ゴーベール 編曲

ショパンの作品の中でも特に有名なこの作品は、1839年に発表された《24の前奏曲》作品28に含まれる1曲です。「雨だれ」という名称はもともと付けられていたものではなく、曲を通して続けられる連打音が雨音を連想させることから、後にこの名で呼ばれるようになりました。穏やかな旋律に始まり、中間部での陰りを経て、再び戻ってくるという、非常に単純な構成ですが、そのシンプルさがこの音楽の美しさをよりいっそう際立たせているように思います。(なお、本日演奏するのは1928年にパリで出版されたフルートとピアノの二重奏版で、編曲にあたって一部カットがされ、おそらくフルートで演奏し易いように調性を変更されています)

5. 道の記憶

上林裕子 作曲

上林裕子さんは京都出身の作曲家で、京都市立芸術大学で学び、1998年からはパリを拠点に活動をしています。彼女の作品は、独特な色彩感で彩られた儂くも美しいものばかりで、それでいて親しみ易さも感じられる、不思議な魅力に溢れています。

この《道の記憶》は、1998年の秋にパリに移ってから2曲目の作品だそうです。初演の際のプログラムノートに上林さんは以下のような文章を寄せました。「この小品集は私にとって、音で綴った日記のようなものである。けれども極力自分自身の思いではなく、ただ淡々とよみがえる道の表情を、スケッチのようにかきとめていきたいと思った。毎日歩いた様々な“道の記憶”をたどる時、音が一緒に舞い散ってくる、それらの音達を拾い集めるように作曲した——」2000年の初演時には「雨上がりの道」、「川辺にて」、「木漏れ日の道」の3曲のみでしたが、後に「三角と四角の道」と「帰り道」が付け加えられ、現在の5曲構成となりました。

第1曲 雨上がりの道

終始繰り返される16分音符の音形が、雨上がりにきらめく雫の様子を表現しています。

第2曲 川辺にて

非常にシンプルな旋律が繰り返されながら、徐々にその表情を変えていきます。

第3曲 三角と四角の道

嬉遊曲と呼びたくなるような明るく軽やかな楽曲。三角と四角は、時折現れる拍子感のズレを意味しているのでしょうか…？

第4曲 帰り道で

ピアノによるどこか空虚な印象の伴奏に乗り、フルートが息の長い旋律を歌います。

第5曲 木漏れ日の道

爽やかな木漏れ日のなかを進むような、清々しく開放感にあふれた音楽です。

【出演者プロフィール】

たかやなぎ まりこ（高柳鞠子）

豊橋市出身。国立音楽大学を経て、同大学大学院修士課程を修了、博士後期課程（器楽研究領域）を満期退学。現在は研究生として在籍し、フィリップ・ゴーパールについての研究を行なっている。2018年より1年間パリ・エコール・ノルマル音楽院で学ぶ。これまでにフルートを大西圭子、名雪裕伸、エミリー・バイノン、トーマ・プレヴォ、佐久間由美子の各氏に師事。ニース夏期国際音楽アカデミーにてソフィー・シェリエ、クロード・ルフェーブル両氏のマスタークラスを修了。室内楽を今井顕、三木香代、永峰高志、青木高志、カンタル・ド・ビュシー、フラウト・トラヴェルソを菊池奏絵、柴田俊幸、古楽アンサンブルを大塚直哉、大西律子、菊池奏絵の各氏に学ぶ。Neflac2019 Young International Professional メンバー。山田貞夫音楽財団（2017、2020年度）、福島育英会（2018～2020年度）奨学生。

すぎもり えり（杉森絵里）

国立音楽大学附属中学校・高等学校を経て、国立音楽大学演奏学科ピアノ専攻卒業、並びにアンサンブル・コースを修了、同大学院器楽専攻伴奏コース修了。これまでにピアノを、金山典子、内川裕子、加藤一郎の各氏に、伴奏法を三木香代氏に師事。第11回ブルクハルト国際音楽コンクール室内楽部門最高位、第22回大阪国際音楽コンクールデュオ部門第3位、他。第12回菅打楽器ソロコンテストにおいて、ベストデュエット賞受賞。第11回宮崎県川南町モーツァルト音楽祭に室内楽で参加、植田克己氏のマスタークラスを受講。2023年にフルート奏者の内山貴博氏による「内山貴博の聴いてみるコンサート」シリーズに参加。現在、器楽の伴奏を中心にアンサンブルピアニストとして幅広く活動している。

【スタッフ】

舞台＝かたぎりけん(片桐 健)

音響＝さはらひろのぶ(佐原宏信)

照明＝いけだとしはる(池田俊晴)

制作＝たかだしょうこ(高田装子)、かがちなつ(加賀茅捺)、いしだあきこ(石田晶子)、ながさかなほみ(長坂奈保美)

票券＝ばんあかね(伴 朱音)

主催：公益財団法人豊橋文化振興財団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業） | 独立行政法人日本芸術文化振興会

企画制作：穂の国とよはし芸術劇場 PLAT